
魔法少女リリカルなのはS T R I K E R S ~アギトの系譜~

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSTRIKERS〜アギトの系譜〜

【Nコード】

N4126BA

【作者名】

Fe

【あらすじ】

一人の少年がミッドチルダに現れた。彼には魔力がなく、リンカーコアもない。本当にごく普通の少年だった。

しかし誰も知らない。彼こそが人類が持つ可能性の体現者なのだ。これはアギトと呼ばれた少年が紡ぐ、優しくも残酷な愛と勇気の物語。

プロローグ（前書き）

まず、ヒロインはスバル。そしてオリキャラとのカップリングです。

次になのはとフェイトの扱いがかなり悪いです。

最後に、エリオとルーテシアのカップリングもあります。

以上を許容出来ない方が気分を害されても、筆者は一切責任を負いかねますのでご了承下さい。

プロローグ

何重にも隔てられた筈のシェルター越しに銃声や砲弾の音が聞こえてくる。

「芦原さん！どうですか状況は？」

「芳しくない。いくらアギトに覚醒していても、俺やお前と違って戦い慣れてない者が大半だからな」

緑の異形から人間の姿に戻った青年は人懐こそうな顔の青年を前に、険しい顔で首を振った。

「何でこんな・・・！何で今更こうなるんだ！」

青と銀の鎧に身を包んだ青年が悔しげに壁を殴る。傍らには赤い目のマスクが転がっていた。

「大丈夫ですよ氷川さん。皆少し慌ててるだけです」

「そうは言いますけどね津上さん！」

氷川と呼ばれた青年は立ち上がったが、津上という青年の笑顔に一歩下がった。

「俺は信じたいです。アギトは人間、皆それをちよつとだけ忘れてるんだって事」

三人が話していると、一人の少年が歩いてきた。

「大丈夫。あの三人は神様だってやっつけたんだから」

その肩をそつと後ろからやって来た女性が抱いた。その時轟音と共に部屋のドアが破られた。

「小川さん、後をお願いします」

氷川がマスクを被ると後頭部まで覆われる。駆動音を響かせ、その

鎧は巨大なガドリリング砲を構えて立ち上がった。人類が生み出した英知の結晶、名をG3-X。

「津上！とにかくこいつらを追い返すぞ！」

葦原も両腕をクロスさせて叫んだ。

「変身！」

緑の光に包まれ、その姿は異形へと変わる。複眼を思わせる深紅の瞳、緑色の角、両腕から伸びる鋭利な爪。かつて神の一人が人間と結ばれた末に生まれたとされる存在、名をギルス。

「出来るだけ殺さずに追い返して下さいよ？」

津上も呼吸を整えながら構えを取る。光と共に腰に巻かれたベルトが燦然と輝いた。

「変身！」

白い光に包まれ、その姿は金色の鎧を纏ったかのような姿へと変わる。深紅の瞳、金色の角、胸に輝く英知の証。人に与えられた可能性が見せる一つの極み、名をアギト。

「小川さん、その子を奥へ」

「分かったわ。三人とも気をつけて」

小川は少年を抱き上げて奥へと走る。その姿を見送り、三人のアギトは咆哮と共に踏み込んできた人間相手に挑みかかった。

「ねえ、おねえちゃん」

腕に抱かれたまま、少年は小川を見上げた。

「ぼくのこと、おとーさんもおかーさんもいらなんて」

「そんな事ない！生まれてきて疎まれるなんて、そんな事は・・・！」

小川は必死で否定するが、それを絶対とする事は出来なかった。何

故なら彼女に抱かれたこの、僅か五歳になるかならないかという子供ですらもアギトの可能性を秘めているのだから。

（北条君がいても上を押さえられなかった・・・連中がアギトを恐れる感情はとことん根が深いみたいね）

一瞬よそ事を考えた時だった。

「っ・・・！」

耳鳴りに似た感覚と共に足場が消える。そんな錯覚を覚えて思わず少年を放り出した。

「逃げて！」

しかし、その少年を投げた先が歪んでいたらしい。何が起こっているのかも分からない顔で飲み込まれていく少年に手を伸ばし、小川は絶叫した。

少年が目を開けた時、そこは知らない天井だった。

「目が覚めたのね。痛いところはない？」

少年はコクリと頷いた。

「公園に倒れていたのだけど・・・まあいいわ。今はゆっくりお休みなさい」

青紫の髪を長く伸ばした女性はたおやかに微笑んで少年を撫でた。

(・・・ぼく、だれだっけ?)

その事実を少年が口にし、女性の顔が凍りつくまで・・・後十秒。

T O B E C o n t i n u

e d

プロローグ？

何かやたらと重い何かが乗っかっている。そんな感覚を覚えて目を開けた。

「あ、おはよ」

丁度胸の辺りに馬乗りになって喜色満面の少女、スバル・ナカジマ

(11) が挨拶してきた。

「う、うわああああッ・・・ゲホゴホ」

思わず叫び声をあげかけ、肺を圧迫されているため盛大に咽た。

「わわっ！トモ大丈夫！？」

「大丈夫じゃないから早く退いてー！」

朝から元気な二人だった。

「もうスバル！トモ君が死んだらどうするつもりなの！？」

エプロンに三角巾と正しい主婦の姿をしたギンガが腰に手を当てて正座するスバルを叱る。その後ろではゲンヤが巻き込まれないようそそくさと炊飯器3号（ナカジマ家ではスバル用、ギンガ用、トモ&ゲンヤ用で計三台の炊飯器がある）から自分の分をよそっている。「あ、あのー・・・ギンガさん、スバルも反省してるみたいだしそのくらいで・・・」

腹の虫を泣かしながら自身も涙目になっているスバルに助け舟を出すのは常にトモの役目だった。毎度彼女の暴走の被害を被っているのもトモというのは皮肉であるが。

「まあ、トモ君がいいなら仕方ないわね。でもいい？次はないわよ

スバル」

「・・・ごめんなさい」

完全に母親の立ち居地であった。

スバルとギンガの実母にしてトモの身元引受人であるクイント・ナカジマが殉職してから三年が過ぎていた。彼女は記憶のないトモに対して名前を与え（トモが救助された時に着ていた服の裏に「きさらぎ とも」とだけ書かれていたので）、家族としてナカジマ家へ迎えてくれたのだ。

それだけに彼女が帰らぬ人となった事に、トモは姉妹以上に打ちのめされていた。

「なあトモ。あの話なんだが・・・」

炊きたてご飯に大粒納豆を乗せながらゲンヤが話しかけた。

「えっと・・・その、まだ・・・」

「もうお父さんったら。わざわざナカジマを名乗らなくてもトモ君は家族でしょ？」

クイントの一周忌を過ぎた辺りから、ゲンヤはこうやってちよくちよくトモに正式な養子にならないかと持ちかけてくる。しかしトモは自分でも不思議とその話を受ける気になれなかった。

そしてトモが困ると必ずギンガが助け舟を出してくれていた。

「そう言うがギンガ。お前も君づけじゃ他人行儀じゃねえか？まあ俺としちゃあ、ギンガかスバルの婿になるんでも構わねえがよ」

スバルは今一つ話についていけないのかキョトンとなるが、トモとギンガは同時に味噌汁を噴き出した。

「げ、ゲンヤさん・・・！ゲホッ・・・いきなり何言ってるんですかあー！」

「俺はそんなに妙な話をしたか？ギンガなりスバルなりをお前が嫁に貰えばそのままお前はナカジマ家の人間になるって話だぞ」

「その前にスバルやギンガさんの気持ちはどうなるんですか！政略結婚だとか許婚だとか今時流行らないでしょう！」

「何だ、家の娘二人はそんなに不細工か？」

ブンブンと音がしそうな勢いでトモは首を振る。

「そんな事ないです！スバルもギンガさんも綺麗だったり可愛かったり・・・何言わせますか！」

「・・・お父さん」

ヒートアップするトモとは対照的に、ギンガの声は氷のように冷たかった。

「お、ぎ、ギンガ・・・？」

「さつきから何をトモ君を困らせてるのかな？かなあ？」

「ギン姉、それ人違う」

微妙にズレたスバルの突っ込みをスルーしつつギンガはそっと箸を置いた。

「次にそうやってトモ君を困らせたなら、お父さんのおかずから納豆を抜くから」

「後生だからそれだけはやめてくれ！」

ギンガ・ナカジマ（13）、既にナカジマ家最強の座を獲得しつつあった。

朝食後。今日は学校も休みなので全員が家にいる。ゲンヤが仕事に出た後、三人で洗濯物を干し、掃除機をかけたなら庭で稽古の時間だった。

「よっ・・・はっ・・・」

トモもギンガの提案でシューティングアーツを齧ってはいる。しかし悲しいくらいに素質がなかった。

「トモ君、避けるのは上手なのにね」

ここはギンガとスバルしか知らない事だったが、トモにはサイコメトリーがある。局にレアスキル認定されると色々面倒なので黙っているものの、かなり強力なレベルだ。

故にギンガが何処を狙って攻撃してくるかが手に取るように分かる。しかし攻撃を当てる番になると、今度は殴られたギンガが受ける痛みを想像してしまい手が鈍る。そんな有様であった。

「スバルはやらない？」

「ううん、いい」

トモがギンガと組み手をする間、スバルは縁側に座って悲しそうにトモを見る。その表情はトモが一番見たくないものだった。

「スバルはやらないほうがいいよ。やっぱり局とか戦うとか、スバルには似合わないし」

トモは事あるごとにこうやってスバルを局から遠ざけようとしていた。彼にとって、恩人のクイントを殺したのは局という認識だったからだ。

（レジー小父さんも、そこは認めていたもの・・・）

レジー小父さんは現在ミッドチルダ地上本部で勤務しているレジアス・ゲイズ中将の事である。スバルにもギンガにも、ゲンヤにすらも話していないが、トモはクイントやその同僚が殉職した事件がレジアス中将とスカリエツィが絡んだものだという事を知っていた。

葬式にやってきたレジアス中将の心を読んだせいだったのだが、その結果レジアスは誰もいない場所までトモを連れて行き、その場で土下座して詫びた。その時にレジアスが何を望んで動いていたのかも知ったトモにはもう彼を憎む気はなかった。

ただ今彼が望むものは、せめてスバルやギンガがそういう局の黒い部分に触れて穢されない事。ただそれだけが彼の望みだった。

そんな毎日が続くなか、ゲンヤの提案で軽い旅行をする事になった。目的地は臨海空港近辺にあるテーマパークで、まず空港でゲンヤと落ち合ってから四人でホテルに一泊。翌朝から一日遊び倒すのが予定となっていた。

「あー楽しみ！ねえトモ、明日何から乗ろうか？」

「絶叫系は勘弁してね」

「というより、身長が足りない乗り物も多いでしょうからゴネないですよ？」

三人でパンフレットを見ながら相談していると、轟音と警報が同時に鳴り響いた。

突如として起こった空港火災。トモは咄嗟に自分の力を全開にして周囲を探った。

（何か、大きくて凄い力が蠢いてる……？けど何だろう、一つの場所なのに沢山声が聞こえるような……ああもううるさい！）
うるさいとは、聞こえてくる力を聞き取ろうとした矢先に周囲で上がりまくっている悲鳴に対してである。

「トモ君？トモ君！」

肩を揺さぶられ、我に返るとギンガが泣きそうな顔で肩を掴んでい

上がる衝動のままに咆哮をあげて拳を突き上げる。その手から放たれた衝撃波で落ちてくる瓦礫が一瞬にして消滅した。

「トモ、君？その体・・・」

何故かギンガが怯えた目でトモを見上げる。その瞳に映った自分の姿を認識し、トモはようやく現状を理解した。

「何、これ・・・僕？」

金色の角、深紅の瞳、金色の胸、何処かで見た覚えもあるが、それは完全に異形の存在だった。

「ち、違う・・・僕じゃない、これは僕なんかじゃない！」

頭を抱えてトモは喚いた。

「違う！違うんだ！僕は人間だ、皆と同じ・・・だから捨てないで、お願いだから・・・ら・・・」

まるでブレーカーが落ちるように意識が落ちる。そのままトモはスバルの安否を心の隅に引つ掛けたまま意識を手放した。

それから数分後。フェイト・T・ハラOWNは得意の高速機動で要救助者を探していた。

《Sir。生命反応二つ、前方20mです》

「ありがとうバルディッシュ」

肉眼でも確認すると、十三歳程の少女と十一歳程の少年だった。

「二人とも大丈夫？」

「わ、私は大丈夫です。でもトモ君が・・・」

少女が抱き抱えていた少年は酷く青褪めており、まるで何かに怯えるように瞼をキツく閉じていた。

《体温と脈拍の低下を確認。早急に医療施設へ搬送する事を推奨し

ます》

「分かつてる。バルディツシュ、なのはに今助けた女の子を救助隊に渡したらすぐこっちへ来るよう伝えて。簡易の治癒魔法でも少しは楽になるといいけど・・・」

《Yes sir》

炎の被害を余り受けていない部屋まで少年を抱えて少女を誘導し、フェイトは右手で術を展開した。

「フェイトちゃん！」

「なのは！？え、こんなに速く来れたの？」

少なくとも直線でのスピードならフェイトのほうがなのはより数段上だ。にも関わらずさつきバルディツシュに通信を繋いでもらってから二分と経っていない。

「違うよフェイトちゃん。ほら、何でか知らないけど天井にぽっかり穴が開いてるでしょ？だから近道できたんだ」

一瞬なのはに火力だけでなくスピードでも抜かされたと自信喪失に陥りかけたフェイトだったが、なのはの言葉でやっと納得した。

「じゃあ急ごう？はやてちゃんが広域魔法で一気に消火するらしいから」

なのはが少年を抱き上げるのを確認し、フェイトも少女を抱えあげた。

目の前に立つのは自分自身。しかしその表情は自分が浮かべたこともないような残酷で酷薄な笑みを浮かべていた。

(君は誰?)

俺はお前さ。お前が持つ可能性、その具現。

(あれは夢じゃなかったの?)

ツレないねえ。お前が天井吹っ飛ばしたんだろうが。

(あれは違う!あれは僕じゃない!あんな力があつたらまた捨てられる・・・!)

誰に?

(誰・・・え、あれ?誰・・・)

全くお前は。覚えてもいない癖に傷だけはいっちょ前にこさえやがって。

(うるさいよ!大体君は・・・えっと・・・)

どーしても呼びたきゃアギトと呼べ。本当は俺個人を示す名称じゃないがな。

(アギト・・・)

額にひんやりした感触がある。その正体を確かめようと目を開けた。

「あ、ギンガさん……」

「気が付いた？」

額に乗せていた濡れタオルを直しながらギンガが微笑んだ。

「……大丈夫、あの事は誰にも話してないから」

「……うん」

やっぱり夢でも何でもなかった。自分は化け物なのだトモはシーツを引つ張りあげて顔を隠した。

「……明日出て行く」

「そう……」

ギンガは予想していたのか、引き止める事もなく呟くように返事をした。

「あ、そうそう」

話題を変えるようにギンガが顔を上げた。

「スバルは無事よ。管理局の人が助けてくれたって」

「よかった……」

ただ。ギンガが付け加えた。

「スバル、管理局に入りたかって」

「……え？」

ある意味自分の力を自覚した以上の衝撃だった。

e
d
.
.
.
.
.
.
.

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U

プロローグ？（後書き）

次回予告

トモとスバル、それぞれのビギンズ・ナイトから四年の歳月が流れた。トモはナカジマ家を出て一人で暮らし、スバルは陸士学校でメキメキと力をつけていた。

そして発足する機動六課。隊長である八神はやては地上本部から送られてくる助っ人と言う名のスパイに頭を痛めていた。

次回、「握手の手は持たず」

あとがき

どうも、お久しぶり（？）です。今回は魔法少女リリカルなのはと仮面ライダーアギトのクロスです。

さてはて、自分の力を恐れるトモは過去の記憶がないままに影に怯え、スバルは自ら泥沼に踏み込んでいく。この二人の運命や如何に！？

あ、スバルよりギンガのほうが仲良くね？というのは間違いないです。トモにとって、ギンガはより甘え易い対象なので。

で、ギンガも弟分をより甘やかしてしまうとそういう訳ですね。ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4126ba/>

魔法少女リリカルなのはSTRIKERS～アギトの系譜～

2012年1月14日23時53分発行